

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所
162-0805 東京都新宿区矢来町 65
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175
発行者 総主事 司祭 矢萩新一

「キリストの満ちあふれる豊かさ」

を目指して

管区事務所 総主事 司祭 エッセイ 矢萩新一

「ついには、私たちすべてが、信仰と神の子の知識において一つとなり、完全な者となって、キリストの満ち溢れる成熟した年齢に達するのです。」(エフェソ4:13)

去る3月25日に、アングリカン・コミュニオン初の女性のカンタベリー大主教、サラ・ムラーリ大主教が着座・就任されました。初代カンタベリー大主教アウグスチヌスから数えて106代目となり、歴史的な歩みが始まりました。

2024年にアングリカン・コミュニオンの一致・信仰・職制常置委員会 (IASCUF0) から「ナイロビ・カイロ提案」、2026年にその補遺文書が発表されています。これは、2023年ナイロビでの全聖公会中央協議会 (ACC-18) において「アングリカン・コミュニオンにおける相違に対処するための構造と意思決定」について、新たな検討を行うことを委託された IASCUF0 が、2024年にカイロで具体的な提案の骨子をまとめたものです。2025年のローマでの会議を受けて2026年に補遺文書が作成されました。教会の一致と対話を促進するための構造的な改革案で、今年6月末にアイルランドで開催される ACC-19 で審議されることになっています。

同提案は、昨今のセクシュアリティに関わる意見の相違や対立などを受けて、カンタベリー大主教、首座主教会議、ランベス会議 (世界の全主教の会議)、全聖公会中央協議会 (ACC、各管区の聖職信徒の代表者による総会) という、一致のための4つの器 (Instruments) の役割を整理し、教区や管区間の関係性を再構築しようとするものです。聖公会は単なる連合体 (federation) ではなく、カンタベリーの主教座との歴史的つながり保ちながら、独立性と相互の共同体性を認め合い、協調し合う交わり (communion) を維持するために、教会の構造と意思決定のプロセスを見直す必要性が強調されています。具体的な主な内容は、「1930年以降のアングリカン・コミュニオンの構造や社会変化を確認し、現代における多様性と平等性を反映して再定義することを目指し、聖公会に属

口会議・プログラム等予定

(2026年3月30日以降・前回未掲載分)

3月

30日(月) 正義と平和・憲法プロジェクト会議 [Web]

4月

13日(月) 正義と平和・憲法プロジェクト会議 [Web]

5月

1日(金) ナザレ委員会・静かなひとときを [ナザレの家]

11日(月) 正義と平和・憲法プロジェクト会議 [Web]

12日(火) 教役者遺児教育基金・建築金融資金運営委員会 [管区事務所]

14日(木) 人権問題担当者会議 [Web]

15日(金) 金融資産運用管理チーム会議 [管区事務所]

15日(金) ウィリアムズ主教記念基金運営委員会 [Web]

19日(火) 法憲法規委員会 [管区事務所 +Web]

20日(水) 祈祷書改正委員会 [Web]

22日(金) 祈祷書改正委員会 [Web]

25日(月) 神学教理委員会 [管区事務所]

29日(金) 法憲法規委員会 [管区事務所 +Web]

6月

8日(月) 聖公会神学院参与会 [聖公会神学院]

9日(火) ~ 11日(木) 定期主教会 [聖公会神学院]

13日(土) 原発のない世界を求めるオンライン講演会 [Web]

15日(月) 主事会議 [管区事務所]

19日(金) ~ 21日(日) 沖縄週間 / 沖縄の旅 [沖縄]

20日(土) 原発のない世界を求める Zoom カフェ [Web]

23日(火) セーフチャーチ・タスクチーム会議 [Zoom]

23日(火) 正義と平和委員会 [Web]

26日(金) 正義と平和・原発問題プロジェクト会議 [Web]

30日(火) 常議員会 [管区事務所]

(次頁へ続く)

する人々が共有する信仰とミニストリーと使命について、誠実に語りあうこと」、「一部の教会間で交わりが損なわれていることを認めつつ、アングリカン・コミュニオンに属するすべての教会が、一致のための4つの器によって、互いに生きた関係で結ばれていることを認識し、誠実に向き合い、愛をもって互いに認め合うこと」、「カンタベリー大主教が持つ特別なミニストリーであるランベス会議・ACC・首座主教会議が補完し合いながらコミュニオンそのものを反映するよう保証し、その指導体制を強化すること」です。これらはすなわち、アングリカン・コミュニオンのアイデンティティのアップデートと、主要機関や4つの器のリーダーシップを広げて聖公会の多様性をよりよく反映させることです。

そのために、ACCの会長職を5つの地域で交代制にすることや首座主教会議やランベス会議の常任委員会の役割強化、ランベス会議をアフリカやアジアなどイギリス以外の地域で開催する可能性を検討することなどが提案されています。〔これからの数か月、数年に向けて、アングリカン・コミュニオンの諸教会が、4つの器によって確立された枠組みの中で、良心に従い、適切な寛容さをもって、「信仰における一致」と「神の御子の知識」において、互いに愛をもって励まし合い、「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する」道を見出せるように祈りましょう〕と補遺文書の最後で呼びかけられています。

この最後の呼びかけは、教会や教区の中での人間関係や考え方の違いにも響くもので、「多様性の一致」というアングリカンの信仰生活の基本に立ち返らせるものだと思います。来る5月23日に東日本教区の第1(定期)教区会が開催され、新教区主教を選出し、日本聖公会としても大きな歴史の変化の道を歩もうとしています。大切に守ってきたものや考え方の違いなど様々な葛藤も経験していくと思いますが、それぞれの正しさ

(前頁より)

＜関係諸団体会議・他＞

- 3月30日(月) 日本キリスト教連合会総会・講演会(Web)
- 4月13日(月) キリスト者平和ネット運営委員会(Web)
- 30日(木) 日本キリスト教連合会総会・講演会(Web)
- 5月3日(日) 大韓聖公会ソウル大聖堂100周年記念礼拝・式典(ソウル)
- 12日(火) 聖公会神学院長期計画プロジェクト会議(用賀)
- 18日(月) 部キ連総会・講演会[大阪+Web]
- 6月4日(木) JCK キープ日本後援会総会[立教大学チャペル会館]
- 13日(土) NCC 財政検討プロジェクト会議[西早稲田]
- 16日(火)～17日(水) 日本聖公会婦人会会長会[守口聖オーガスティン教会・大阪]
- 20日(月) 日本宗教連盟80周年記念式典[東京]
- 27日(土)～7月5日(日) 全聖公会中央協議会(ACC-19)[アイルランド・ベルファスト]

や正義感を押し付けようとする、そこには争いや分裂が生じていきます。思うようにことが進まないときにこそ、イエスさまがゲツセマネで祈られたように、「父よ、できることなら、この杯を私から過ぎ去らせてください。しかし、私の望むようにはなく、御心のままに。」(マタイ26:39b)と、信仰と希望と愛の源である神さまに信頼して歩み続けるものでありたいと願います。

□主事会議

第68(定期)総会期第8回 2026年4月13日(月)

＜主な報告・協議＞

1. 2025年度収益事業会計について、承認。
2. 資産運用部の設置について、目的や規定案を確認。
3. 大韓聖公会の「聖公会モンゴルの森」プロジェクトへの協力について、「海外宣教・協力資金」から1ヘクタール分(約300万円・
4. 聖公会神学院長期計画プロジェクトについて、管区事務所の協力方法について懇談し、財政面や必然性についてなどの説明を求めたこととした。
5. ハンセン病市民学会(5/16-17 奄美)への宣

教主査・松浦信司祭の出席と費用負担について、承認。

6. 海外出張について、全聖公会中央協議会 (ACC-19、6/27-7/7 アイルランド・ベルファスト) への西原廉太主教・吉谷かおるさん (ACC 議員)、ポール・トルハースト司祭 (通訳) の出張を承認。

次回会議：2026年6月15日(月)

□常議員会

第68(定期) 総会期第10回 2026年3月15日(日)

Web

<主な決議事項>

日本聖公会第70(臨時) 総会決議に関して、

* 第4号決議：教区新設について、東日本教区の設立に関するスケジュール等は予定通り進め、この度の管理主教の職務は、新設される教区(東日本教区)の教区会の公示および第1回新教区設立教区会の日から、新教区主教就任までの法規第11条に定める職務権限とすることを確認し、総会議員・代議員への文書を作成して理解を求めることとした。

* 第5号決議：東日本教区規則の承認について、議場で修正した個所が誤りであったことを確認し、総会議員・代議員へ文書で通知することとした。

第68(定期) 総会期第11回 2026年4月21日(火)

<主な決議事項>

1. 海外出張承認に関して、大韓聖公会ソウル主教座聖堂100周年の記念礼拝・式典(2026/5/2-4 韓国・ソウル) への上原榮正首座主教の出張(3/30 メール稟議追認)、CCEA 主教会(10/15-19 韓国・ソウル) への上原榮正首座主教の出張を承認。
2. 2025年度収益事業会計決算に関して承認。
3. 資産運用部に関して、その規定案を確認し引き続き検討していくこととした。
4. 大韓聖公会の「聖公会モンゴルの森」プロジェクトへの協力に関して、「海外宣教・協

力資金」から300万円(1ヘクタール・1千本分)の協力を承認し、地球環境のために祈る主日に向けて正義と平和委員会からアピールしていくこととした。

5. 聖公会神学院長期計画プロジェクトに関して、計画概要を確認しプロジェクトとの丁寧な協議を行っていくことを確認。
 6. 管区共通聖職試験委員に関して、教理担当を宇津山武志司祭(横浜)から上原成和司祭(沖縄)に、教会史担当を中原康貴司祭(神戸)から松山健作司祭(京都)に交代することを承認。
 7. 宗教法人日本聖公会の代表役員の任期に関して、現行の法人規則では「代表役員の任期は2年とする」となっているが、開催時期のずれなどがあり、「代表役員の任期は次期定期総会終了の日までとする」と変更することを次回定期総会に提案することを確認。現規則でも「代表役員…は、…任期満了後でも、後任者が就任する時まではその職務を行うものとする」とあることを確認。
 8. 改正祈祷書の編集担当者に関して、アイ・パブリッシング(教団出版局解散後に設立された会社)に有償で依頼することを承認。
- * 常議員：上田亜樹子司祭の定年退職に伴い補欠者の矢萩栄司司祭に今回から交代、高橋宏幸主教の退任後には補欠者の入江修主教に次回から交代する。

次回会議：2026年6月30日(火)

□各教区

東京

- 聖職按手式 2026年5月9日(復活節第5主日後土曜日) 13時半～ 聖アンデレ主教座聖堂 司式：主教 フランシスコ・ザビエル高橋宏幸 説教：司祭 エッサイ矢萩新一 司祭按手志願者：執事 ヒルダ藤田美土里

東日本

- 日本聖公会東日本教区第1(定期) 教区会 2026年5月23日(土) 9時～18時 開会

聖餐式：聖アンデレ主教座聖堂 議場：聖
アンデレホール



九州

- ・ 聖職按手式 2026年6月27日(土) 11時
～ 九州教区主教座聖堂 福岡聖パウロ教
会 司式：主教 マルコ柴本孝夫 説教：主
教 ルカ武藤謙一 司祭按手志願者：執事
ダビデ佐藤 充

†逝去者 靈魂のパラダイスにおける光明と平
安を祈ります。

司祭パウロ金山昌照(大阪・退) 2026年3月
30日(月) 逝去 (79歳)

司祭オーガスチン西川正文(神戸・退) 2026
年4月5日(日) (90歳)

《人事》

横浜

- | | | |
|-------------------------|--------------------|--|
| アブラハム森山徹太郎 | 2026年4月1日付 | 総務主事を補佐するため、その事務取扱の一部を委嘱する。 |
| <信徒奉事者認可>
(伊豆聖マリヤ教会) | 2026年2月17日付(任期：1年) | グレゴリー市川 登 |
| <信徒奉事者認可>
(静岡聖ペテロ教会) | 2026年4月1日付(任期：1年) | テモテ小野田 真、マルコ平岡義和 |
| 司祭 リチャード・マイルス・ジョンソン | 2026年4月1日付 | 横浜山手聖公会協働司祭に任命する。(任期：2029年5月31日まで) |
| 司祭 ヨハネ相澤牧人(退) | 2026年4月1日付 | 主教イグナシオ入江修管理のもとで伊豆聖マリヤ教会において協力司祭として勤務することを委嘱する。(任期：1年) |
| 司祭 ヤコブ三原一男(退) | 2026年4月1日付 | 主教イグナシオ入江修管理のもとで逗子聖ペテロ教会において嘱託司祭として勤務することを委嘱する。(任期：1年) |
| 司祭 ヨハネ前田 浩(退) | 2026年4月1日付 | 主教イグナシオ入江修管理のもとで横浜聖クリストファー教会において嘱託司祭として勤務することを委嘱する。(任期：1年) |
| 司祭 バルナバ大野清夫(退) | 2026年4月1日付 | 主教イグナシオ入江修管理のもとで平塚聖マリヤ教会において嘱託司祭として勤務することを委嘱する。(任期：1年) |
| 司祭 バルナバ田澤利之(退) | 2026年4月1日付 | 主教イグナシオ入江修管理のもとで林間聖バルナバ教会において嘱託司祭として勤務することを委嘱する。(任期：1年) |

中部

- | | | |
|-----------------|-------------|--|
| 司祭 ヨセフ下原太介 | 2026年3月31日付 | 新潟聖パウロ教会主日礼拝等協力の任を解く。 |
| 司祭 エリエゼル中尾志朗(退) | 2026年4月1日付 | 司祭ヨセフ石田雅嗣のもとで、新潟聖パウロ教会において、主日礼拝等への協力を委嘱する(任期：1年) |

京都

聖職候補生 クララ小野恭子	2026年3月31日付	桑名エピファニー教会および四日市聖アンデレ教会での勤務を解く。
	2026年4月1日付	主教座聖堂付とし、司祭センリア大岡左代子および司祭サムエル小林宏治のもと、京都伝道区内教会での勤務を命じる。
司祭 エレナ古本みさ <信徒奉事者認可> (富山聖マリア教会) (上野聖ヨハネ教会) (岸和田復活教会) <信徒奉事者認可および分餐許可> (奈良基督教会) (聖アグネス教会)	2026年4月1日付 2026年4月1日付(任期:1年)	ウイリアムス神学館主事(非常勤)に任命する。 ピリポ廣瀬康夫 ルカ木村直史 チャニング熊取谷志郎、ヒルダ岸 雅子、フランシス大森俊治 ダビデ松本 誠 サムソン眞継 穰、サムエル藤村大輔、R. ジョージ プッセル

大阪

主教 バルナバ小林 聡	2026年3月31日付	聖贖主教会、並びに大阪聖パウロ教会の管理牧師の任を解く。 博愛社協力チャプレンの任を解く。
司祭 フランチェスコ成岡宏晃	2026年4月1日付	松陰中学校・高等学校からの要請を受け、非常勤チャプレンの任に就くことを許可する。(週2日 任期:3年)
主教 アンデレ磯 晴久(退)	2026年4月1日付	5月以降、司祭ヒューム ウイリアム ユーワンのもと第4主日聖ルカ教会、ペテロ金山将司のもと第5主日恵我ノ荘聖マタイ教会・富田林聖アグネス教会での主日礼拝の協力を委嘱する。(任期:1年)
司祭 ペテロ齊藤 壹(退)	2026年4月1日付	5月以降、司祭ペテロ金山将司のもと、第1主日富田林聖アグネス教会、第5主日聖ルシヤ教会の礼拝の協力、並びに博愛社、聖バルナバ病院、こひつじ乳児保育園チャプレンを委嘱する。(任期:1年)
司祭 ペテロ岩城 聰(退)	2026年4月1日付	5月以降、司祭ヒューム ユーワンのもと第1、第5主日聖ルカ教会、司祭ジョイ千松清美のもと第3主日東豊中聖ミカエル教会での主日礼拝の協力を委嘱する。(任期:1年)
司祭 ペテロ竹林徑一(退)	2026年4月1日付	司祭ステパノ柳時京のもと川口基督教会囑託(川口基督教会150年誌執筆担当)を委嘱する。司祭ヨハネ古澤秀利のもと第5主日聖ガブリエル教会での主日礼拝の協力を委嘱する。。 京都教区からの要請を受け、第4主日京都教区内教会において主日礼拝等への協力を許可する。(任期:1年)

司祭 テモテ宮嶋 眞 (京都教区・退)

2026年4月1日付 司祭ヨハネ古澤秀利のもと第4主日大阪城南キリスト教会の礼拝の協力を委嘱する。
桃山学院大学において嘱託チャプレンに任命する。(任期:1年)

神戸

司祭 マルコ藤井尚人

2026年4月1日付 管理牧師主教バジル八代智のもとで姫路顕栄教会での勤務(チャプレン業務も含む)を委嘱します。

沖縄

執事 クリストファー大倉信彦

2026年3月20日付 名護聖ヨハネ教会牧師補に任命する。

司祭 ペテロ高良孝太郎(退)

2026年4月1日付 管理牧師司祭ドミニカ朴美賢のもと、名護聖ヨハネ教会において主日礼拝協力を委嘱する。

《教会・施設》

名古屋聖ステパノ教会(中部)

2026年3月31日付 電話・FAX廃止 なお、2026年4月1日以降の連絡先は 教会HP:<https://nssk-chubu.org/church/04stephen/> または、中部教区センター(052-858-1007/052-8581008)へ
住所:〒466-0804 名古屋市昭和区宮東町 260 (変更なし)

□「代祷表 2026年5月」について

ACP (Anglican Cycle of Prayer) 発行の代祷表(翻訳版)は、『管区事務所だより』の同封物として奇数月にご送付させていただいております。「代祷表 2026年5月」発行の際、2026年5月24日の主日名を誤って記載しておりました。お詫びし訂正をいたします。

(誤) 復活節第6主日 ⇒ (正) 聖霊降臨日

管区事務所のHPには訂正版がアップロードされておりますが、念のため今月号の『管区事務所だより』に訂正版を同封いたします。お手数でもお手元の「代祷表 2026年5月」とお差し替えの上、ご活用いただけますと幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

管区事務所



☆『Thy Kingdom come (み国が来ますように)』 祈りのしおりについて

毎年 昇天日から聖霊降臨日までの期間に行われる「世界的な祈りのキャンペーン」のお知らせです。今年は5月14日(木・昇天日)～24日(日・聖霊降臨日)がキャンペーン期間です。祈りのしおりを各教区・教会にご送付いたしましたので、お手元に届き次第ご活用ください。今年もみなさまの積極的なご加禱を、どうぞよろしく願いいたします。

管区事務所 総主事 司祭 エッサイ 矢萩新一

東日本大震災 15周年で想うこと

「東日本大震災 15周年記念の祈り・講演会」報告

～2026年3月11日 東北教区主教座聖堂 仙台基督教会 + オンライン開催～

東北教区主教 主教 フランシス 長谷川清純

2011年3月11日は、私たちには未来永劫忘れられない記憶となっています。災害は、15年経つと忘れ始められ、世代交代する30年経つと忘れ去られる、と言われていました。

しかし決して忘れてはいけない、風化させてはなりません。私たちには、あの日の出来事から教訓を学び、今まさに起こっている現実から目をそらさず、未来への希望・光を指し示す責任があります。東日本大震災被災者支援プロジェクトは、2021年の10周年に「震災証言集 わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」を発行しました。



あの日あの時の衝撃はあまりにも甚大で、未曾有の災害で、被害規模は歴史的記録的でした。誰もが生まれて初めて経験したのです。大地震・巨大津波・原子力発電所過酷事故による放射能汚染という三重苦でした。被災地域は太平洋岸南北約500kmにわたり、発生直後の被

災者は約47万人でした。

地震により停電、断水、家屋倒壊、地割れ等が発生しました。ついで巨大津波が襲い、防潮林、船舶、家、車などあらゆるものを飲み込み、押し流しました。死者・行方不明者は22,336人(2026年3月1日現在)。翌日、東京電力福島第一原子力発電所の3機が次々と爆発し、その過酷事故によって放射性物質が拡散されて空気、大地、海が広範囲にわたって汚染されました。

被災者は避難所に、その後仮設に、年を経て災害復興住宅にと住まいを転々としなければなりませんでした。

日本聖公会は、大震災2か月後の5月に「いっしょに歩こう!プロジェクト」を立ち上げて、管区全体で被災者支援に動き出しました。それは2年間行われた後、東北教区に引き継がれ「だいに東北」、「東日本大震災支援室」「東日本大震災被災者支援プロジェクト」と変遷してきました。同じように管区としては、「原発と放射能の関する特別問題プロジェクト」、「日本聖公会正義と平和・原発問題プロジェクト」となり、被災された方々と関わっています。

当初から東北教区各地に拠点が置かれ支援活動、ボランティア奉仕が繰り上げられました。北から釜石市、気仙沼市、仙台市、新地町(磯山)、郡山市、小名浜市でした。京都と大阪、神戸の3教区は合同して小名浜を中心的に応援してくださいました。

また、信徒と教役者たち、諸学校の生徒・学生と先生たち、それに知人や友人たちが日本中

から東北の被災地を訪ねてこられ、人々と出会い、語り合い、触れ合い、泣き笑いを積み重ねられました。人々にどれだけ力づけられたか、感謝しかありません。

私たちが経験した宝物のひとつは、「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。」のロマ書の言葉が自分の身に起こったという貴重な得がたいものでした。こうして私たちの信仰に肉づけられました。そして、支援する側と支援される側という枠組みは本来的ではなく、この枠組みが超越されたところのまことの関わりがあるという気づきも与えられました。一対一の顔と顔を見つめ合う、まことの仲間、友という間柄が生まれていました。これは永続される関係です。

ですから、現在も続けている月1回の「水曜喫茶」には、今もって各地から訪問される方々があり、ケーキやお菓子の差し入れもあり府中聖マルコ教会や沖縄教区、田園調布カトリック教会、昨年一区切りされた柳城女子大学、また幾人かの個人から届けられています。



水曜喫茶 (2025年12月)

また別の宝物のひとつは、祈りの力です。東北教区では、毎月の11日に教区主教座聖堂 仙台基督教会礼拝堂において、「東日本大震災を憶えて 午後2時46分の黙想」という礼拝を献げています。東日本大震災の嘆願を唱え、被災者のため、死者のために祈るオリジナルの式文を用い、聖歌を歌って献げています。

そして毎年3月11日には、主教座聖堂を中心

にしつつ教区内各教会で東日本大震災周年記念の祈り(礼拝)を重ねてきました。全国でも一緒に祈っていただき感謝しています。主に仙台の会場では礼拝後に講演会を開催し被災者から、支援者から、あるいは防災等の専門家などからお話を伺っております。継続は力、祈りで希望を見出しております。

15周年を迎えた今年の3月11日は、14時15分から長谷川司式、主教座聖堂主任司祭八木正言司祭の補式、また発災時から被災地とその支援活動に寄り添ってくださっている北海道教区主教笹森田鶴主教に説教をいただき大いに慰められ、駆けつけていただいた管区総主事矢萩新一司祭に励まされました。全国各地からも足を運んでいただいた信徒たちとも一緒に、有難いことでした。そして青森、秋田、盛岡、郡山、小名浜合わせて6教会でも祈りと黙祷が献げました。

15時10分からは、佐藤清吾さん(元宮城県漁業協同組合十三浜支所運営委員長<組合長>)から「津波のあとの十三浜に住み続ける」と題して講演をいただき、失意の中から立ち上がり、漁業再興に尽力された経験と、脱原発に懸命に取り組まれてこられたお話を伺い、そこにある全被造物への畏敬の念と、いのちの尊厳を冒すものへの勇氣ある抗いを知らされる時間となりました。(この「記念の祈り」と「講演会」の全内容は東北教区HPのYouTubeでご覧になれます。)



15周年の祈り (2026年3月11日)

毎年何処で、たとえば熊本地震、北海道東部胆振地震、能登半島地震等々大規模自然災害が次々と起きています。2011年支援活動に役立ててと沖縄教区から頂戴した10人乗り車輛(「うちなんちゃー号」)は、そのお役を終えようかと考えていた矢先に起きた能登半島地震を受けて、急遽車検をして京都教区に譲渡、今もボランティアのために走り続けています。

私たちは、東日本大震災で学んだ教訓を生かせるようにと願います。15年経っても解決されない課題がいくつもあります。コミュニティー崩壊、被災者の高齢化、特に放射能汚染は深刻で、現在も原子力緊急事態宣言発令下にありません。当時被曝した子どもたちで、400人以上が甲

状腺がん罹患しています。汚染された土地から全国に避難されている方々は3万人以上おられます。その方々が差別されることなく、人権が守られ生活が保障されるのはもっとも基本的な権利です。

最後に、世界中で起きている紛争や戦争の犠牲者、そして様々な自然災害で亡くなられたすべての方々の魂の平安のために祈ります。また、今現在、言うに言われぬ苦しみや悲しみを背負う人たちに、神様の豊かな慰めと、人々の寄り添いと思いやりが届きますように祈りましょう。神様の愛が分かち合われ、お互いの平安のため祈り合ってまいりたいと思います。

特集 神学校から

2026年度 聖公会神学院の神学教育について

聖公会神学院 校長 主教 ルカ 武藤謙一

いつも聖公会神学院のために、また神学生のために祈りとご支援をいただき、心から感謝申し上げます。1910年に創立した本校は、今年創立116年、1972年に用賀の地に移転してから54年目を迎えます。ご存知のように、本校は基本的には本科(3年コース)の聖職および奉仕者養成のため、礼拝、学び、共同生活を柱とした教育課程を展開しています。しかしながら、神学生の減少が続く現状のなかで、2023年度から新たにオンラインによる「特任聖職特別コース」「信徒の奉仕・召命コース」を開設しました。これらのコースは、本校での共同生活を基とした本科において学ぶことが困難な方々が、それぞれの生活や学習環境にて学ぶことができるように、より幅広く、柔軟に学習の機会を提供するものです。

また現役教役者、奉仕者の継続教育も本校の大切な働きの一つです。どの教区でも聖職者数が不足し、一人の聖職者が複数の教会を担当し、また教区や管区の働きも担うようになり、多くの聖職者が多用な日々を送っておられます。また信徒数の減少も深刻な状況であり、教会の存続維持に関心が向けられがちですが、多様に複雑に変化する社会のなかで、教会の存続意義が問われています。現代社会の中にあって、伝統を大切にするとともに、新たな使命と課題を見出し「神の世界の神の教会」として希望をもって歩むことが求められています。本校では2018年から「継続教育・研究休暇コース」を設け、現役教役者が一定期間、本校に滞在して教育と研究に取り組むことを支援しています。また2022年度から

は、管区や教区で行われる様々な教育・研修を積極的に支援するため、また聖職の個人的な学びを支援するために「研修・教育支援プロジェクト」を設けています。昨年11月にはこの制度を申請して学ばれた二人の聖職にその成果を話していただく「研究発表会」を行いました。今年度も6月末と12月末を申請の締め切り日として申請を受け付けていますので、ご応募ください。

2023年に開催された日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ、「ここからまた歩きはじめよう～いのちに仕え、となりびととなるために～ 1 神の御声に耳を傾けよう 2 人々の声に耳を傾けよう 3 世界の声に耳を傾けよう」は、日本聖公会の宣教の指針です。神の御声に、また人々と世界の声に聴き、その必要に応えるために、聖職・信徒の皆さんがよりよく整えられるために、本校の上記の取り組みが生かし用いられることを願っています。

2026年度に関して

2026年度の本科には1名(横浜教区)が入学いたします。また「信徒の奉仕・召命コース」は2名(東京教区、九州教区)、「特任聖職特別コース」には3名(中部教区、神戸教区、九州教区)が新たに受講いたします。在學生は、本科2年次1名(東京教区)、「信徒の奉仕・召命コース」2名(九州教区、東北教区)、「特任聖職特別コース」4名(東北教区、沖縄教区、東京教区、東京教区)です。

また「継続教育・研究休暇コース」により、1名(沖縄教区)が4月から1年間、もう1名(ブラジル聖公会サンパウロ教区)が5月から2か月間、本校にてそれぞれの課題に取り組みます。

2024年3月から開催している「説教セミナー」は平野克己先生(日本基督教団代田教会牧師、本校説教講師)を講師として、説教者から一方的に伝達される説教から会衆である聴衆において出来事となる説教への転換を目指して昨年度も6月と今年2月に開催しました。実際の福音書のテキストを決めて、聖書を読み、黙想し、釈

義し、黙想し、説教を作成するという過程を体験し、また分かち合うプログラムです。参加者は決して多くありませんが、み言葉を伝えるという大切な使命を改めて見直す貴重な機会になっています。今年度は9月16日(水)～18日(金)に開催予定ですので、一人でも多くの方が参加されることを願っています。なお、この研修については校友会から交通費補助の支援をいただいています。

昨年度も開催した「非暴力な会話のためのワークショップ」は、管区の協力により各教区ハラスメント担当者を対象に行いました。今後もこのようなワークショップが管区また各教区で開催されることが期待されます。本校としても管区と連携、調整しつつ、大切な課題としてまいります。

オンライン受講生スクーリングは二泊三日という短期間ですが、全国にいる受講生たちが本校で共に礼拝し、学び、生活を共にする機会であり、互いの交流を深めることができ、教職員にとっても嬉しいプログラムです。今年度も2027年2月に開催する予定ですが、今年度から「特任聖職特別コース」受講者には、個別のスクーリングをも実施し、単に学習だけでなく共同の礼拝や生活を通して自らの召命について黙想するときとなることを願っています。

20年前から日本ルーテル神学校と毎年7月に交流会を開催していますが、本年度は「エキュメニズム」の授業を共同授業とすることになりました。日本福音ルーテル神学校と本校の先生が講師となり、学生たちは、前半はオンデマンドで講義を受け、来年2月には本校に宿泊して集中講座を行います。またこの共同授業にはウイリアムス神学館の学生も参加することになっており、三つの神学校の学生たちが一堂に会して学ぶという、これまでにない形での授業となります。どの神学校も神学生が少ないなかで、これからの神学校間の協働の一つの契機となることを期待しています。

聖公会神学校(アジア・太平洋地域)校長会議(Anglican Seminary Deans Network Asia-Pacific ASDN)は神学教育における相互の連携と協力を目的としているネットワークです。7月にはフィリピンで過去3年間のプログラムの振り返りと今後の取り組みについて協議する会合が開催され、神学生の参加も求められています。今回はわたしに代わって山野貴彦先生と神志那愛恵神学生が参加する予定です。また日本は韓国と東アジア地区のグループを構成しており、今年度は7月末に本校で年次会合を開催することになっています。

現在の本校建物は1972年に建設されたものであり、経年劣化も進んでおり、毎年補修などに多額の費用を要しています。神学生数が減少するなかで今後の聖公会神学院の在り方を検討するために昨年度、「聖公会神学院長期計画プロジェクト」が設けられ、今後の本校の在り方について検討してまいりました。その結果については、参与会(教区主教は全員が参与)において、また定期主教会においても説明させていた

だきました。そして本年6月には本校にて参与会また定期主教会を開催していただくことになりました。主教会の皆様にも長期計画プロジェクトメンバーまた教職員ともじっくり話し合い、また神学生とも共に礼拝し、交わっていただき、本校の将来構想について現状とビジョンを分かちあえる機会になることを望んでいます。今年度から将来構想の実現に向けて具体的な取り組みを少しずつ進めていきたいと考えています。

長年本校を支援してくださった後援会は、今年度から「聖公会神学院友の会」として再出発しました。3月28日には発足記念礼拝を行いました。これから各教会にも案内が届くと思いますが、一人でも多くの皆様に会員となってご支援いただければ幸いです。

これからも聖公会神学院のため、皆様のお祈りとお支えをよろしくお願い申し上げます。

特集 神学校から

2026年度 ウィリアムス神学館の神学教育について

— 新たな時を刻む —

ウィリアムス神学館 館長 司祭 ヨハネ 黒田 裕

いつもウィリアムス神学館をおぼえご加禱・ご支援をいただき心から感謝申し上げます。イスラエルの軍事戦略に引きずられる形でしょうか、同国とアメリカによるイランへの侵攻が開始され一ヶ月以上が経ちますが、未だ停戦は予断を許さず、ホルムズ海峡はじめ湾岸諸国の不安定化が各国の経済と安全保障に暗い影を落としはじめ、世界は不穏な空気に包まれようとしています。現下の中東情勢とウクライナおよびガザで犠

牲になられた方々の魂の平安と、いまを必死に生きておられる方々に主の癒しとお支えがありますように、さらに、強権的軍事国家が最悪のかたちで手を組んで国際法秩序を完全に崩壊させることなく、この地上が主の平和の反映するところとなるよう、心から願い、祈ります。そのような情勢のなか、先月にはサラ・ムラーリ大主教がカタベリー大主教に着座されました。アングリカン・コミュニオン分裂状況やこの世界の痛みに対

しどのように癒しのミニストリーを実践すべきなのか、また、ランバスコールや日本聖公会の宣教協議会からの提言を踏まえつつ、教会がどのような宣教ヴィジョンを描き、主の弟子として奉仕を全うしうのか、神学教育の重要性をひしひしと感じます。

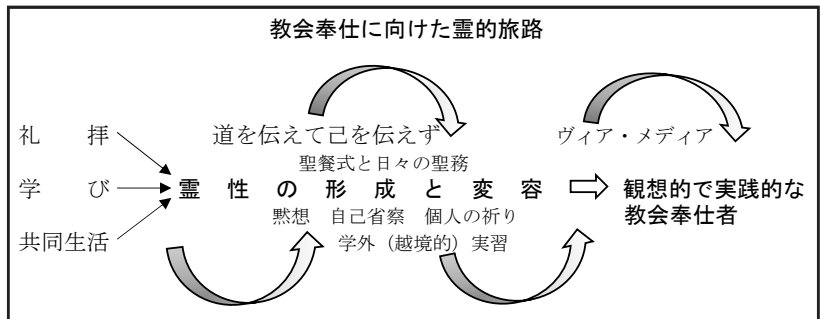
(1) 新年度を迎えて

毎年のようにスタッフ体制が変わり、その一方で、随時カリキュラムの改訂を図ってきた神学館ですが、今年度は、比較的大きな変化の年となります。まず人事体制としては、昨秋、西原廉太・中部教区主教(立教大学総長)が、伝道教区となった京都教区の管理主教に着任されたことに伴い、本館理事長に就任されました。新体制のもと、スタッフとしては、古本みさ司祭(奈良基督教会副牧師・平安女学院チャプレン)が改めて教区人事により非常勤の主事として任命され、新たに中井珠恵主事(西宮聖ペテロ教会信徒)、黒田恵主事(京都教区主教座聖堂・聖アグネス教会信徒)が着任、さらに宮田玲本館教授/図書館司書が会計担当スタッフとしてお働きくださることとなりました。そして、新入生として立川亮神学生(京都復活教会信徒)を迎えることとなり、本科生は2名となりました。聴講につきましても、この原稿の執筆時点で、すでに5名を越える方々からお申込みをいただいています。

(2) 教育体制の刷新と国際連携

以上のような新体制のもと、教育体制についてもいくつかの刷新が図られます。まずは、これまでの3学期制から前・後期の2期制へと移行します。これにより多様で弾力的な科目配置が可能となります。教育ヴィジョンについては、5年にわたる私自身のヴァージニア神学校(VTS)での学びを活かし、本館がどんな人材

を養成しようとしているのかを「観想的で実践的な教会奉仕者」というコンセプトで表現することとしました(各教会へお送りした26年度の要項をご参照ください)。内容は次の通りです。まず、本館では、神学校生活の全体を、神と世への仕え人となることに向けた霊的な旅のはじまりと捉えています。そこでは、概念図にあるように、礼拝・学び・共同生活という三本の矢が「霊性の形成と変容」に向かって収斂し目標に向かって展開する、という一連の流れが想定されています。その経路は、神学校のモットーである「道を伝えて、己を伝えず」の小径であり、教会暦にみられるように、繰り返し同じ場所を通るような循環型の時の流れに見えつつ、全体としては聖餐式がヴィジョンとして提示しているような「主の食卓—神が主催する天上の宴(これは、キリスト教会がヴィジョンとしてもつ人間社会の理想でもあります)—を範型として、「み子が再び来られるまで」(日本聖公会現行祈祷書175頁) 続く、終末論的な緊張とそこへと向かう方向性を持っています。その小径はまた、いまま神の創造行為は続いており、キリスト者はその協働者であるという継起的な創造の過程のうちにあります。さらに、そこで歩まれる霊的な旅は、聖公会の中心的な神学「ヴィア・メディア」つまり、神学や思想あるいは様々な価値判断における極論のどちらにもくみせず、それらを越えた先に真理を見出そうという途上性をもっています。それゆえ、その旅路は、両極を和解的に橋渡しする使命を帯び、神との関係において他者と連帯する道行きでもあります。その道程を歩む者が「観想的で実践的な教会奉仕者」なのです。



この内容は、毎年のように本誌上で報告してきましたように、2020年の2学期から段階的に実際の教育に取り入れられてきたものですが、今後も実践からのフィードバックを受けながら、よりふさわしいものへと改訂していきたいと考えています。

さらに、後期最後の2週間(今年度は2027年2月16日-27日)に「リーディング・ウィーク」を新設しました。この期間には「読書」や「読むこと」をテーマにした読書会のほか、正課の補助的な学びとなりうる集中講義や公開講座を行う予定です。今年度は今のところ、次の2つのプログラムが予定されています。ひとつめは、日本ルーテル神学校と聖公会神学院の共同開設科目であり、石居基夫・ルーテル学院大学長と西原廉太主教が担当される聖公会神学院「神学特講1(エキュメニズム論)」への参加です。オンデマンドでの受講のほか1泊2日の対面集中講義が予定されているので、その講義には本館から東京に出向いて出席する予定です。もうひとつは、京都府立医科大学の杉岡良彦先生を講師として実施される「キリスト教と医学」と題した集中講義と公開講座です。これは、本館教授会の継続プログラム「シリーズ『宗教と医学』」の一環で、今回の「ねらい」としては、「キリスト教と医学の密接な関係を歴史的、理論的に考察することで、両者の関係について理解を深め、キリスト教が現代社会に有する可能性と聖職者の使命をあらためて考える」(要覧より)となっています。対面講義は2月17日(水)のⅢ、Ⅳ限、公開講座は2月20日(土)の午後となっています。公開講座につきましては、期日が近づきましたら、あらためて皆様にご案内いたします。

国際的な連携プログラムとしては、VTSの「聖公会研究センター」(CACS/Center for Anglican Communion Studies)がこのほど新たに立ち上げた「聖公会課外神学教育プログラム」への参加が検討されています。全聖公会規模では、神学校の連携組織であるCTEAC (Commission for Theological Education in the Anglican

Communion)の定例ズーム会議が3月18日に行われ、今夏ベルファストで開催される第19回全聖公会中央協議会(ACC-19)への報告内容が、CTEACアドバイザーのスティーブン・スペンサー司祭よりシェアされました。主な内容としては、神学教育におけるパラダイム転換を企図したCTEAC Post Colonial Educational Approachが紹介され、そこでは、伝統的な情報伝達型の教育から、1.誰もが学び人であり教師である、2.文脈横断的な相互性および双方向性、3.ディサイプルスシップ(キリストの弟子であるということの再確認とその深化および展開)における生涯学習と信徒・聖職のための使命、という3点ですが、ダイナミックに交差するイメージが提示されていました。また、北米の神学校の紹介があったのですが、他管区と同様、居住しての学びが難しくなっているという点が指摘されていたことも、本科生については全寮制を採用している本館にとって興味深い内容でした。さらに3年計画で進められてきたATAP (Asia Theological Accompaniment Programme)が最終年を迎え、ATAP Conference 2026がジャカルタにて6月8日から12日の日程で行われ、筆者が参加する予定となっています。またASDN (Anglican Seminary Deans Network)についても、ASDN 2026 Conference が7月21日から24日にマニラで開催される予定で、今回は各国神学校の代表のほか神学生の参加も推奨されており、聖公会神学院から代表と神学生が派遣されることになっています。さらにASDN地域連携(日韓)の枠組みにおいては、26年度「交換神学生プログラム」が予定されており、4月27日から5月3日にかけて、大韓聖公会・聖ミカエル神学校から2名の神学生が本館に滞在され、9月1日から6日という日程で、本館から浅海由里恵神学生が聖ミカエル神学校に滞在して交流プログラムをもつことになっています。また、前後しますが、7月27日から30日の日程で、毎年日韓3神学校の持ち回りで行われているASDN地域会議が聖公会神学院を会場に行われます。こうして、同時並行的に進んでい

る神学校の国際的な連携と協働の成果もまた、今後の神学教育のより豊かな展開へと活かされていくことでしょう。

(3) 新たな時を刻む

さて、今年度の入学礼拝を2日後に控えた月曜日のこと。本館食堂の壁掛け時計が止まっていました。電池交換をしようと何気なく時計を裏返すと、卒業記念としてこれを寄贈した卒業生たちの名前が書かれており、そのなかに、3年前に天に召された、立川神学生のご尊父のお名前がありました。ごく小さな出来事ではありますが、そこに、次の世代へ継承されたミニストリーと変容への一步を踏み出した神学館が、新たな時を刻みはじめたという徴をみる思いがしました。一

年前の本欄で「2035年問題」として取り上げた財政難の解決には容易ならざるものがあります。しかし同時に、これが単に本館だけの問題ではなく、聖公会神学院をあわせた日本聖公会全体の神学教育の課題であることが関係者のあいだでも共有されはじめ、近いうちに、この課題の担当主教を交えて両校の実質協議に向けた話し合いの場がもたれようとしています。日本聖公会の宣教と奉仕職の豊かな展開へと仕える神学教育の刷新に向けて、今後とも本館の神学教育へのご支援とご加禱を賜りますよう、どうぞよろしく願い申し上げます。

『マイノリティ円卓会議 2026』報告

— 「人種差別・マイノリティ排除の嵐に抗して、
共生の天幕をひろげよう」に出席して —

管区事務所

宣教主事 司祭 ステパノ 卓 志雄

マイノリティ円卓会議2026は、「人種差別・マイノリティ排除の嵐に抗して、共生の天幕をひろげよう」を主題に、2026年3月12日から14日までルーテル市ヶ谷センターで開催され、対面とオンラインを含め延べ50名が参加された。背景には、2015年に東京で開催された第3回「マイノリティ問題と宣教」国際会議がある。同会議では、日本におけるヘイトスピーチや世界的なレイシズム、ゼノフォビアの問題を共有し、教会が差別や憎悪に抗い、多民族・多文化共生社会の実現に向けて取り組む使命を確認した。

その後、2017年にマイノリティ宣教センター(CMIM)が設立され、人種主義との闘い、ユースプログラム、和解と平和のスピリチュアリティの推進を柱として活動を展開してきた。日本聖公会

も理事と運営委員として活動に責任を担っており、各教会・礼拝堂もその活動に関心を示している。また、市民団体や教会ネットワークと連携しながらマイノリティの人権課題に取り組んできたが、継続的な協議の場の形成は十分に実現していない。

今回の円卓会議では、世界各地で強まる移民・難民排斥や歴史修正主義の動きに対し、教会がどのように向き合うかを共有し、日本における人種差別撤廃法や包括的差別禁止法の制定を目指す課題を確認することを目的とした。さらに、日本国内のマイノリティや教会、市民社会とのネットワークを強化し、交差差別やジェンダー正義の問題にも取り組む今後の連携のあり方を検討する場となった。

マイノリティ円卓会議2026は、開会礼拝から始まり、祈りのうちに会議の歩みが整えられた。礼拝に続いて行われた基調報告では、マイノリティ宣教センター（CMIM）運営委員会のメンバーを中心に、さまざまな地域と課題に関する報告がなされた。

まず、田森茂基さんがアイヌ民族をめぐる歴史と現状を踏まえ、教会の宣教が向き合うべき課題について語った。続いて神谷武宏さんは、沖縄に集中する軍事基地の問題を取り上げ、琉球／沖縄の人びとが直面している現実を共有した。海外からの報告として、マルティン・クリークさんはドイツで強まる移民・難民排斥の動きについて述べ、大韓聖公会のイ・ヨン司祭は韓国社会における移住民への差別と憎悪の実態を報告した。また、クワカ・クボさんはカナダ合同教会が取り組んでいる難民・移民支援の活動を紹介し、教会が果たし得る役割を示した。

さらに、日本社会の現状についても多様な視点から報告が続いた。山岸素子さんは日本における移民女性の置かれている状況を語り、イ・ナヨンさんは韓国におけるジェンダー正義の歩みと課題を整理した。角谷志保美さんは日本の難民受け入れ政策の現状と課題を指摘し、朴金優綺さんは在日朝鮮人の現状、とりわけ朝鮮学校をめぐる差別問題について報告した。さらに上野玲奈さんは、いまだ解消されていない部落差別の現実を取り上げ、師岡康子さんは人種的マイノリティに対するヘイトスピーチやヘイトクライムの状況を説明した。最後に平良愛香さんが、性的マイノリティと教会の関係について語り、教会が向き合うべき課題を提起した。

これらの報告を受けて、参加者たちは全体討論とグループ討論を重ね、それぞれの経験や課題を分かち合いながら理解を深めていった。最後には総合討論を通して共通の課題を確認し、会議としての共同声明を採択した。

私からは、植民地主義の克服、脱植民地主義のプロセスがまだまだ十分ではないことが、今日の世界の諸問題を引き起こしていると言っても過言ではない、という点を指摘した。難民・移民・貧困、そして中東地域で起きている紛争や戦争も、植民地主義の清算、すなわち脱植民地主義

の課題と深く関わっている。また、日本におけるマイノリティの問題も、日本社会における植民地主義の克服という課題と無関係ではないことを訴えたのである。

また、この三日間で印象に残った言葉は「うるさい」という言葉である。沖縄・普天間基地の近くにある保育園では、子どもたちの日常の上空を米軍機が通過していく。園舎の中で絵本の読み聞かせをしている時も、園庭で遊んでいる時も、突然、F35やF15といった戦闘機の轟音が空から降ってくる。その瞬間、子どもたちは思わず耳をふさぐ。ある映像では、砂を器に入れてままごと遊びをしていた子どもが、両手に器を持ったまま耳を押さえていた。突然の騒音に驚き、とっさに耳を守ろうとしたのだ。しかし両手がふさがっているため、十分に耳をふさぐこともできない。その小さな姿は、騒音の中で遊ばざるを得ない現実を象徴している。

興味深いのは、沖縄の子どもたちが普段、米軍機の騒音に対して「うるさい」と叫ぶことがほとんどないという点である。轟音は日常の一部となり、あまりにも当たり前になってしまっているからだ。耳を押さえるほどの騒音であっても、「うるさい」と声に出すことすらしない。それは、騒音に慣れてしまったというよりも、むしろ感覚が麻痺してしまっている状態と言えるだろう。

そこで保育士たちは、あえて子どもたちに「うるさい」と言うことを促す。うるさいものに対して「うるさい」と言う。当たり前のことのように、その当たり前を取り戻すことが必要だからである。教師が率先して「うるさい！」と声を上げると、子どもたちもそれに続いて叫ぶようになる。間違っていることに対して「間違っている」と言う。その姿勢を子どもたちに示すことは、大人にとって重要な責任でもある。

このような状況は、本当に平和な社会と言えるのだろうか。日常化された騒音の中で、子どもたちの感覚が麻痺していく現実、私たちに深い問いを投げかけている。正しくないことが長く続くと、それを正しくないと言う力さえ失われてしまう。だからこそ今、私たちはその現実に向き、当たり前を問い直す必要があるのではないだろうか。

今回の円卓会議の締めくくりとして、マイノリティ円卓会議最終日である3月14日、日本聖公会東京教区聖アンデレ教会において「No! Racism! ひろば」が開かれた。1960年3月21日、シャープビル虐殺で多くの命が奪われた出来事を覚え、世界ではこの日を国際人種差別撤廃デーとして祈りと行動が呼びかけられている。その歩みに連なる集いとして、開催されたのである。



この音楽の集いは、音楽と祈りを通して差別のない社会を願う小さな広場のような場であった。参加した11のチームは、それぞれの歌や演奏、踊りを通して、平和への願い、差別への悲しみ、そして希望を表現した。言葉だけでは伝えきれない思いが、リズムやメロディーとなって会場に満ち、集った人びとの心を静かに結び合わせていった。

世界では排外主義の風が強まり、日本社会においても国籍やルーツの違いをめぐる緊張が高まっている。しかし、この日ひろばに響いた歌声は、互いの違いを恐れるのではなく、共に生きる社会をつくりたいという願いの表れであった。人びとが出会い、祈り、歌い、踊るそのひときは、社会が少しずつ「からふる」で、柔らかく、しなやかなものへと変わっていく希望を感じさせる時間であった。「No! Racism! ひろば」は、その歩みの確かな一歩であった。

非暴力な対話のためのワークショップ

— NVC (Nonviolent Communication) の理論と手法を学ぶ —

管区ハラスメント防止・対策担当者
クララ 西原美香子(中部)

2026年3月13日(金)から14日(土)にかけて、聖公会神学院を会場に、「非暴力な対話のためのワークショップ」が開催されました。昨年に続き2回目の開催となる本研修は、聖公会神学院の主催、日本聖公会管区ハラスメント防止・対策担当者の協力のもとに実施されました。参加対象は各教区のハラスメント防止・対策担当者とし、NVC (Nonviolent Communication) の理論と手法を学び、それぞれの教区へ持ち帰って、非暴力な対話の方法を体験的に分かち合うことを目的としました。

講師には、NVCを日本において広く伝えてこられたNVCジャパン・ネットワークより、西東万里さん

と栗山のぞみさんをお迎えしました。お二人の丁寧で深いファシリテーションに導かれながら、参加者は単なる知識としてではなく、自らの体験を通して対話のあり方を学んでいきました。

NVCは、アメリカの臨床心理学者マーシャル・B・ローゼンバーグ博士によって提唱された非暴力コミュニケーションのプロセスであり、「観察 (Observation)・感情 (Feeling)・ニーズ (Need)・リクエスト (Request)」という四つの要素を手がかりとして、自分と相手の内面に起こっていることを丁寧に見つめ、関係性の回復と再構築を目指すものです。しかし今回の研修において繰り返し強調されたのは、これら四つの要素を単な

る技法として用いるのではなく、その「間(あいだ)」にあるもの、すなわち互いの存在に耳を澄まし、身体感覚を伴って相手と向き合う姿勢そのものでした。

プログラムは、朝晩の礼拝を中心に据えつつ進められました。祈りのうちに始まり、祈りのうちに終わる時間の流れの中で、対話そのものが信仰的営みと深く結びついていることが、静かに、しかし確かに示されていたと感じられます。

研修の中で特徴的であった実践の一つが、「食べる瞑想」とも呼ばれる沈黙のワークでした。食事の時間にあえて言葉を交わさず、視覚・嗅覚・触覚・味覚・聴覚といった五感を通して、食べるという行為そのものを味わうことで、参加者は自分の身体の反応や内面の動きに意識を向けていきました。普段は何気なく行っている食事が、これほど豊かな気づきをもたらすものであることに驚く声も多く聞かれました。このような実践は、自分自身の内面に気づく力を養い、他者の声に耳を傾けるための土台を整えるものでであると実感することができました。

また、今回の研修では「共感トランプ」と呼ばれるカードが用いられました。このカードには多様な感情やニーズの言葉が記されており、参加者はそれらを手がかりにしながら、自分の内面を言語化していきます。対話の中で生じた出来事や感情を起点に、「私はいま何を感じているのか(感情)」「その奥で何を大切にしているのか(ニーズ)」「それを満たすために何を願うことができるのか(リクエスト)」という流れを何度も繰り返し体験しました。このプロセスを通して、感情の背後にあるニーズに気づくこと、そしてそれを他者と分かち合うことの難しさと大切さを、多くの参加者が体感したことと思います。また、実際の相談において話を聴く際に、感情やニーズ以外のことを差し挟まないための手がかりとして、このカードが有効であることも学びました。

こうした学びの中で浮かび上がってきたのは、「どちらが正しいか」という問いから離れることの重要性でした。私たちはしばしば、対立や葛

藤に直面したとき、正しさや責任の所在を明らかにしようとしています。しかしNVCは、そのような応報的な枠組みから一步離れ、「どちらも大切である」という視点へと私たちを招きます。すなわち、対立の背後にあるそれぞれのニーズに目を向け、関係そのものを回復していく「修復的対話」へと歩み出すことが求められています。

さらに重要な点として、対話とは単に言葉のやり取りではなく、身体を伴った全人的な営みであることが繰り返し語られました。頭で理解した言葉だけでは、真の意味での共感やつながりは生まれません。呼吸に意識を向け、身体感覚を味わいながら相手の言葉を受け取るとき、はじめて「心からの対話」が可能になることを、参加者は体験的に学びました。

この研修を通して得られた学びは、各教区へと持ち帰られ、それぞれの現場において分かち合われていくことが期待されます。特に重要なのは、この学びが知識として伝達されるのではなく、体験として共有されていくことです。実際に体験することによってこそ、対話のあり方は徐々に根づき、共同体の文化として育まれていくのではないのでしょうか。

今夏に開催される管区定期総会において、セーフチャーチ・ガイドラインの制定が議案として扱われる予定です。教会が誰にとっても安心して身を置くことのできる場となるためには、制度や規範の整備に加えて、日常的な関係性のあり方そのものが問われます。その意味において、NVCの実践は、セーフチャーチの理念を具体的に形にしていこうとする重要な手がかりとなるでしょう。

「二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである」(マタイ18章20節)との御言葉にあるように、私たちがともに集い、互いの声に耳を傾けるその「間(あいだ)」に、主ご自身が働いておられることを信じます。その信頼のもとに、これからも対話を通して関係を築き上げていく歩みが、それぞれの場において豊かに実を結んでいくことを願っています。

特集 サラ・ムラーリ 第106代 カンタベリー大主教就任・着座式の様子

The 106th Archbishop of Canterbury in the Chair of St Augustine in Canterbury Cathedral, at the Installation service, surrounded by Anglican clergy, ecumenical and interfaith guests from around the world.

カンタベリー大聖堂の聖アウグスティヌスの椅子に着座する第106代カンタベリー大主教は、就任式において、英国聖公会および聖公会の聖職者、また世界中から集まったエキュメニカルな教派の関係者に囲まれていました。(写真: ACNS/ Anglican Communion News Service)



The Installation of Most Revd and Right Hon Dame Sarah Mullally as the 106th Archbishop of Canterbury in Canterbury Cathedral. The service was attended by more than two thousand people including senior members of the Royal Family and the Government, Anglican clergy and leaders from across the Church of England and Anglican Communion, and diverse guests including faith leaders, charities, healthcare workers and school children. Wednesday 25th March 2026.

Photo: Neil Turner for Lambeth Palace

カンタベリー大聖堂にて、サラ・ムラリー大主教（最高位聖職者）が第106代カンタベリー大主教に就任しました。式典には、王室や政府の要人、英国聖公会および聖公会の聖職者や指導者、宗教指導者、慈善団体関係者、医療従事者、学童など、2,000人以上が参列しました。2026年3月25日（水）

写真：ニール・ターナー（ランベス宮殿提供）



The Installation service was attended by members of the UK Royal Family
就任式には英国王室のメンバーが出席しました。（写真：ACNS/ Anglican Communion News Service）

「デйм・サラ・ムラリー大主教就任・着座式および

首座主教会議」報告



2026年3月25日～26日

日本聖公会

首座主教 ダビデ 上原榮正

3月25日、イギリスのカンタベリー大聖堂に於いて、サラ・ムラリー主教の第106代カンタベリー大主教着座式が行われました。式典にはウィリアム皇太子夫妻を始め約2,000人の参列がありました。式の様子はユーチューブでも放映されたから、世界中でご覧になられたと思います。

ローマ司教聖グレゴリウスによって派遣された聖アウグスティヌスがキリスト教布教のため西暦597年にイギリス・ケントに到着して以来約1400年、初めての女性のカンタベリー大主教となりました。

デйм・サラ・ムラリー大主教は、元は看護師として働かれています。1999年にイングランド政府の国民保健サービス(NHS)の首席看護官に指名されます。2005年には、大英帝国デйм・コマンダー(Dame Commander)の称号を受賞されています。サラ大主教の名前の前にデймとあります。これは男性ならナイトですが、主教は女性なので女性版騎士・ナイトの称号ということです。

イングランド看護局長時代に召命を感じ、サウス・イースト神学校で学び、2001年に執事、2002年に司祭に按手され、特任聖職とされました。

2年後2004年専任聖職者への召命を感じたサラ大主教は政府の職を辞し、サザーク教区で専任聖職者として歩み始められました。サラ大

主教ご自身が、その時の出来事が「人生で1番大きな決断」であったと語っておられました。その後、ソールズベリー大聖堂の財務参事、2015年にエクセター教区のクレジットン教区補佐主教、2018年セント・ポール大聖堂で第133代ロンドン教区主教に就任しました。イギリスで最初の女性の主教が誕生したのは2015年で、サラ主教は4人目の女性の主教となりました。

昨年1月のジャスティン・ウェルビー大主教の辞任に伴い、第106代のカンタベリー大主教への選出となりました。ジャスティン大主教は長年の間、教会関係者が大勢の青少年たちへ性的虐待を繰り返していたことへの責任をとって辞職されました。青少年への虐待について、私たちが聞かされていたことは、ジャスティン大主教ご自身が正しく処理されていなかったことを知らなかったことでした。でも、ジャスティン大主教は英国聖公会のトップの地位にある者として責任を取られたということでした。この出来事は他事ではなく、日本聖公会でも起きたことを覚えておきたいと思います。

今回、カンタベリー大主教の座に女性が着任しました。そのことによって聖公会の保守派グループ「世界聖公会未来会議」(GAFCON=ガフコン)は、ムラリー大主教をカンタベリー大主教として認めないとのメッセージを送りました。またア

ングリカン・コミュニオンとは別の組織を立ち上げ、聖公会を更に分裂させようとしています。これだけでなく、戦争、紛争、地球温暖化、気候変動、災害、ジェンダー、人種差別や偏見など、サラ大主教のこれからは多くの困難が待ち受けています。でも、着座式に参集した多くの首座主教たちは、サラ主教の支持を表明しました。

着座式には、老若男女が参加し、聖書や聖歌も英語以外の言語が使用され、アフリカの歌やダンス、聖歌も英語以外の歌も歌われました。これは、私たちの聖公会には多様な国家、民族、人種、言語を持つ人々がいることのしるしです。サラ大主教が分裂ではなく、一致を強く望んでおられることの証です。

また着座式の冒頭、サラ大主教と子どもたちとの応唱で、ご自分が何のために大主教として召されて来たかを証しされたのは印象的でした。

サラ主教が牧杖で外から大聖堂の扉を3度叩くと扉が開かれ、子どもたちが出迎えます。そして中にいる子どもたちが質問をしますのです。

「あなたは何故、私たちのもとに遣わされたのですか。」

サラ大主教が答えます。

「私は大主教として、皆さまに仕え、キリストの愛を宣べ伝え、皆さんと共に心と魂、思いと力を尽くして主を礼拝し、愛するために遣わされました。」と。

私たちは法律や習慣、慣習などの決まりごとの中で安心を得て暮らしています。しかし、私たちの安心や安全を得ている代わりに、どこかで他者を傷つけ、排除しているなら、変革が必要です。時には、掟や法を越えるかもしれません。イエスさまはそのために十字架に掛けられ、殺されました。私たちの住む世界には、貧しく、弱く、小さくされた人々が大勢います。その人々と共に私たちが福音を分かち合うことの意味が問われています。

着座式が、聖週を前にした慌ただしい時期の3月25日、「聖マリアへのみ告げの日」に行われ、サラ大主教も「お言葉通り、この身になりますように」と祈られたのが印象的でした。



Messages of encouragement for the new Archbishop of Canterbury from around the Anglican Communion

The Most Revd David Eisho Uehara (Primate of Nippon Sei Ko Kai, Japan), following the service, shared his thoughts that it was 'really wonderful that they've chosen a female Archbishop of Canterbury and it's a wonderful thing for the Anglican Communion.'

首座主教 **ダビデ 上原榮正**（日本聖公会）礼拝後、彼は「カンタベリー大主教に女性が選ばれたことは本当に素晴らしいことであり、聖公会にとって素晴らしいことだ」と述べました。

(写真・記事一部抜粋: ACNS/ Anglican Communion News Service)

世界の聖公会と「サラ・ムラリー カンタベリー大主教

就任・着座式」

～ カンタベリーからのポストカード ～

管区事務所

渉外主事 司祭 ポール・トルハースト

2026年3月25日(水) - 受胎告知の祝日(聖マリアへのみ告げの日) - は、聖公会にとってまさに歴史的な日でした。

サラ・ムラリー師が第106代カンタベリー大主教に就任し、女性として初めてその地位に就いたことは、世界中で大きなニュースとなりました。カンタベリーの街には、これから起こるであろう変化への期待と、これから訪れるであろう素晴らしい出来事への希望が満ち溢れていました。

私は幸運にも、日本聖公会首座主教であるダビデ上原榮正師を支えるために、この式典に立ち会うことができました。

この式典は、近年の緊張関係によって、時に分断感が生じていたにもかかわらず、聖公会全体から人々を結集させました。世界中から集まった人々と共に過ごすことで、人々がリラックスし、会話を交わし、共に時間を過ごす「舞台裏」を垣間見ることができました。また、聖公会の未来についての彼らの考えや、日本聖公会(NSKK)に対する印象を聞く機会にも恵まれました。

信徒数が少ない教会であるため、日本聖公会は日本や東アジア以外ではあまり知られていないと思われがちです。しかし、私が話を聞いた多くの人々は、日本聖公会との温かい思い出や繋がりを、いつも笑顔で語ってくれました。このことから、日本聖公会は「規模以上の影響力」を持っていることを改めて幾度となく実感しました。その独特な個性と働きは、私たちが気づかないうちに、聖公会全体に影響を与えているのです。これは、私たちが静かに誇りに思ふべきことであ

り、今後もさらに発展させていくべきものです。

カンタベリー滞在中、私が感じた一つのテーマは「喜び」でした。

私たちは、聖公会の一員であることが必ずしも常に喜びに満ちているとは考えにくいかもしれませんが、そう考えるべきですし、そうあるべきです。

サラ大主教の就任式は、もちろん喜びにあふれた式典でした。この重要な出来事は、教会がますます人々で溢れ、賑わい、多忙になる未来へと歩みを進める大きな変化と希望をもたらすでしょう。

さらに、式典そのものにも喜びがありました。イギリスの教会の礼拝は時に堅苦しく、厳粛な雰囲気にも包まれることがありますが、今回の式典には喜びにあふれた要素がたくさんありました。心を高揚させる合唱曲、荘厳なオルガン演奏、そして心温まる感動的な瞬間などです。特にアフリカの聖歌隊の歌声は喜びに満ち溢れており、イギリスの主教たちが思わず席で身をよじっているのを目にしました!

式典中も式典後も、サラ大主教は教会が喜びを再発見できるよう支援したいと語りました。それは「ありのままの私たちとして神に愛されている喜び、そして常に神が私たちと共に行きわたることを知る喜びです。そして、私たちは信仰の道を共に歩み、その一致を祝い、互いに励まし合うことで、それを実現できるのです。」と。



At the end of the service, Archbishop Sarah greeted the Prince and Princess of Wales outside the West Door of the Cathedral. From there, she walked through the Christ Church Gate of the cathedral precinct and prayed a blessing on the city and the diocese.

就任・着座式の終わりに、サラ大主教は大聖堂の西扉の外でウェールズ公夫妻を出迎えました。その後、大聖堂敷地内のクライストチャーチ門を通り抜け、地域と教区に祝福の祈りをささげました。

(写真：ACNS/ Anglican Communion News Service)



今回の訪問で、もう一つ小さな喜びがありました。

それは、大好きな「ビショップズ・フィンガー」と称されるビールを再び味わうことができたことです。このビールの名前は、かつて巡礼者たちをカンタベリー大聖堂へと導く巡礼路の道標として使われていた、指の形をした古い道標に由来しています。



(写真提供：ポール・トルハースト司祭)

その日を振り返りながら、この歴史的な出来事は一人の人物に焦点を当てた出来事でしたが、

同時に私たちすべてに「クリスチャンとして、私たちは皆、世界に喜びをもたらすよう召されています。」と語りかけているのだと気づきました。

結局のところ、私たちは皆「指」を持っており、それをどのように使うかを選ぶことができます。傷つけるために使うか、祝福するために使うか。人生を困難にするために使うか、神の愛を分かち合うために使うか。日々のささやかな行動を通して、私たちは神の国（そして喜び）が私たちのもとに、そして私たちを通して訪れるよう招かれているのです。

明るくも肌寒い春の日、カンタベリーの雰囲気は、教会の新たな章の幕開けを告げる喜びと期待に満ちていました。

サラ大主教が私たちを導き、力を与えてくださるよう祈り、私たちもまた、それぞれの役割を果たす準備を整えましょう。そうすれば、私たちは共に世界に祝福をもたらすことができるでしょう。



日本聖公会管区事務所ホームページ <http://www.nskk.org/province/>

☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメール、また郵便でお寄せください。

comm-sec.po@nskk.org 広報主事(田村浩一) デスク宛て